

虫垂憩室の2症例

北九州市立若松病院外科

森崎 隆 佐藤 裕 岸川 英樹

九州大学医学部第2病理

岩 下 俊 光

TWO CASES OF DIVERTICULUM OF THE VERMIFORM APPENDIX

Takashi MORISAKI, Hiroshi SATO, Hideki KISHIKAWA
and Toshimitsu IWASHITA*

Department of Surgery, Kitakyusyu Municipal Hospital
and The Second Department of Pathology, School of Medicine, Kyusyu University*

索引用語：虫垂憩室

I. はじめに

虫垂憩室は比較的古くは疾患で、本邦のこれまでの報告は43例にすぎない¹⁾²⁾。そのうち42例は仮性憩室であり、今回われわれも2例の虫垂仮性憩室を経験したので、本邦報告例44例の臨床的検討を加え報告する。

II. 症 例

症例1：39歳，男性。

主訴：右下腹部痛。

既往歴：特記事項なし。

家族歴：特記事項なし。

現病歴：昭和57年4月17日，右下腹部痛が出現。2日後，近医を受診し，急性虫垂炎の診断にて当科紹介されるも理学的所見に異常ないため，経口腸透視を施行したところ，虫垂憩室と診断され，手術目的にて入院。

現症：全身所見，頭，頸，胸部に異常なし。腹部は平坦，軟で，圧痛なく，腫瘤触知および筋注防御もない。

検査所見：白血球数 $4,900/\text{mm}^3$ と正常。その他の血液・尿・生化学の所見にも異常なし。

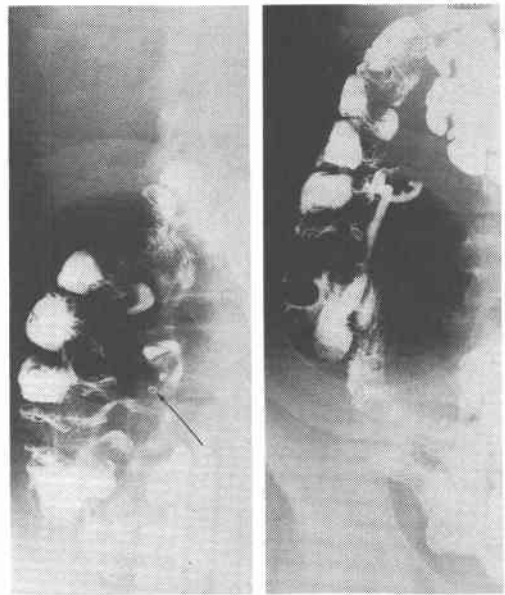
胸・腹部単純撮影：異常なし。

経口腸透視：虫垂に2個の憩室を認める(図1)。

手術所見：開腹時，腹水なく，虫垂にも炎症を認めなかった。型のごとく虫垂切除を施行した。

切除標本所見：虫垂には炎症なく，間膜側に3~4

図1 経口腸透視：虫垂に2個の憩室



mmの2個の憩室を認める(図2)。

病理組織所見：2個とも，炎症所見のない仮性憩室である(図3)。

術後経過は順調で，第8病日に退院した。

症例2：42歳，男性。

主訴：右下腹部痛。

既往歴：特記事項なし。

家族歴：特記事項なし。

現病歴：昭和61年4月9日より右下腹部痛が出現

<1987年2月18日受理>別刷請求先：森崎 隆
〒808 北九州市若松区白山1 北九州市立若松病院
外科

図2 症例1の肉眼所見：虫垂中央，間膜側に3~4 mmの2個の憩室

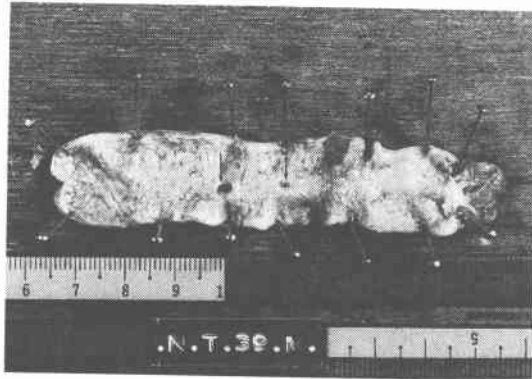
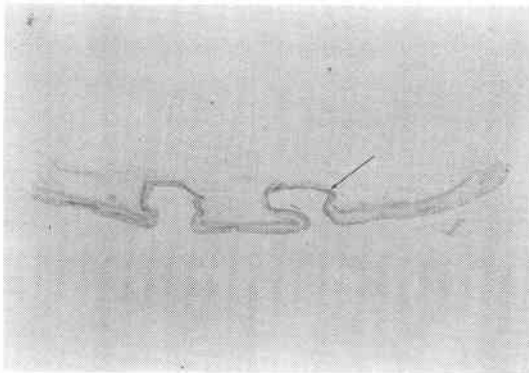


図3 症例1の病理組織所見（ルーベ像）



し、次第に増強。3日後、近医を受診し、急性虫垂炎の診断にて抗生剤の投与をうけるも改善せず、4月14日、当科を紹介された。

現症：全身所見，頭，頸，胸部に異常なし。発熱なし。腹部は平坦で，右下腹部に圧痛および Blumberg 徴候あり。筋性防御なし。

検査所見：白血球数 $11,500/\text{mm}^3$ とやや増加。その他の血液，尿，生化学の所見に異常なし。

胸，腹部単純撮影：異常なし。

Ultrasonography (US)：腫大した虫垂をみとめた。

以上の所見より，急性虫垂炎の診断にて，手術を施行した。

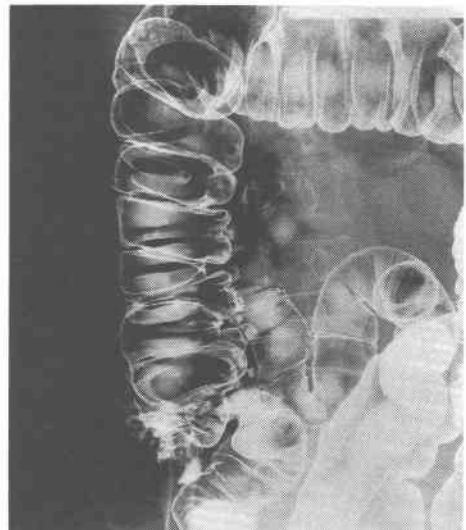
手術所見：虫垂の腫大と先端に1個の憩室があり，腹水なく，虫垂間膜内膿瘍を認めたため，虫垂切除術とドレナージ術を施行した。

切除標本所見：虫垂先端に1個，虫垂中央部の間膜側に1個憩室を認め，後者の憩室は間膜内膿瘍腔と交

図4 症例2の病理組織所見（ルーベ像）：矢印は間膜側憩室の間膜内穿孔部



図5 症例2の注腸透視：右側結腸に十数個の憩室を認める。



通を認める。

病理組織所見：どちらも仮性憩室であり，間膜側の憩室は憩室炎と，それに連続した間膜内膿瘍を認める。虫垂先端部の憩室と粘膜には炎症所見を認めない（図4）。

術後経過は順調で，第9病日に退院した。外来で注腸透視を施行したところ，右側結腸に多発性の憩室を認める（図5）。

III. 考 察

虫垂憩室は，腸管の全層を有する真性憩室と，筋層を欠如する化性憩室とに分類される。真性憩室の報告は少なく，欧米においては，Trollopeら³⁾によれば，

1,373例の虫垂憩室中43例(3%)であり、本邦では45例中1例(2.2%)であり、虫垂憩室はほとんどが仮性憩室である。

虫垂憩室の頻度は、欧米、本邦でさまざまな報告がある。例えば、欧米では、Collinsら⁴⁾の切除虫垂5万例(90%は外科的切除、10%は剖検例)の検索では691例(1.4%)であり、Dellikalisら⁵⁾の575例の虫垂切除例の検索では10例(1.7%)などである。本邦では、池田ら⁶⁾の70例の虫垂切除中4例(5.7%)や、村田ら⁷⁾の227例中5例(2.2%)、三好ら⁸⁾の961例中6例(0.6%)などである。しかしながら三好らの報告では、本症を認識してからの頻度は、2.8%と増加したとしている。欧米でも Deschènesら⁹⁾の報告では、全体としては、37,861例の虫垂切除中127例(0.33%)の頻度が、本症を認識して注意深く検索する前後では、0.18%から0.68%に増加している。組織学的検索にてはじめて本症が診断された例もあり、池田ら⁶⁾によれば、組織標本については、縦断切片などを作成することにより、特に間膜側の憩室、発見率が高まったと報告されている。

虫垂憩室の発生原因に関しては、真性憩室では種々の説があり、一定していない。仮性憩室の原因は、一般的には、虫垂内圧の上昇により、虫垂間膜側の血管貫通部位などの抵抗減弱部位を通じて粘膜が脱出するためとされている。

次に、本邦における虫垂仮性憩室を臨床的に検討する。

性別、年齢：男性80%、女性20%と男性に多い。年齢は、18歳から66歳までで、平均年齢は41歳である。

臨床症状：本症の主訴で記載のあった40例中35例までが右下腹部痛であった。これに対する術前診断は、記載のあった40例中、急性虫垂炎が29例、慢性虫垂炎が4例、結腸憩室症が2例、虫垂憩室が3例、回盲部腫瘍と結腸癌がそれぞれ1例ずつであった。腸透視により虫垂憩室の存在が術前に確認されていたものは、自験例を含めわずか5例のみで、ほとんどは虫垂炎として手術を受け、術中、術後の標本検索にて診断されている。虫垂炎との鑑別は困難と思われるが、平均年齢が41歳と比較的中、高齢で男性に多い点などが特徴として挙げられよう。

憩室の数、部位：虫垂憩室での数では、単発例が19例(45%)、多発例が25例(55%)と多発例が多い。憩室の発生部位では(表1)。単発例、多発例共に虫垂間膜側に発生したものが55%と過半数であり、両側に発生したものの25%を加えて80%と、間膜側が好発部位と

表1 虫垂憩室の部位

	虫垂間膜側	反間膜側	両側
単発例	12	7	0
多発例	12	2	11
計	24(55%)	9(20%)	11(25%)

表2 虫垂憩室炎と虫垂炎との関係

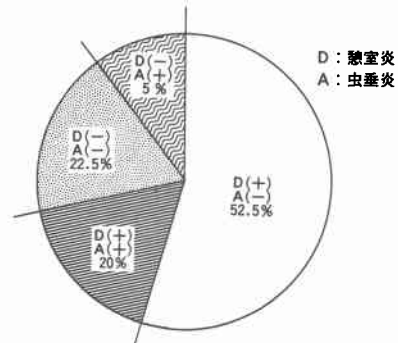


表3 虫垂憩室の膿瘍、穿孔例 (n=44)

	膿瘍	穿孔
虫垂間膜側	11	2
反間膜側 及び 両側	0	5
計	11(23%)	7(16%)

いえる。

分類：虫垂仮性憩室を手術標本での憩室炎と虫垂炎の有無により分類してみると(表2)、憩室炎はあっても虫垂自体には炎症のないものが52%と過半数を占めており、必ずしも虫垂炎を随伴するとは限らず、憩室炎として発症することの方が多いと考えられる。虫垂にも憩室にも炎症を認めないものが自験例を含め9例(22.5%)あるが、このすべての症例において、程度や持続期間の差こそあれ、右下腹部痛の訴えがあり、ほとんどが虫垂炎として手術されている。

合併症：虫垂憩室の合併症では、膿瘍形成が10例(23%)、穿孔が7例(16%)であった(表3)。穿孔は非間膜側の憩室に多かった。

併存疾患：虫垂憩室の併存疾患では、右側結腸憩室が11例(25%)あり、横行結腸癌1例、盲腸癌1例、虫垂癌1例であった。われわれの症例2においても、術後の注腸透視にて多発性の右側結腸憩室を認めている。右側結腸憩室の合併が多い点は、虫垂憩室の発生

原因を考える点で興味深いことである。虫垂憩室と診断された場合、結腸憩室の合併を考慮し、また結腸癌の合併もあるので、術中・術後の精査が必要である。

治療：虫垂突起は、それ自体が憩室のようなもので、その狭い中に生じた虫垂憩室は壁が薄く、憩室炎により容易に膿瘍や穿孔性腹膜炎へと進展しやすいことが推察される。従って治療方針としては、他の手術中に虫垂憩室が見つかった場合や、腸透視にて偶然発見された場合には、予防的虫垂切除を勧める意見が多い。

IV. まとめ

虫垂憩室の2症例を、本邦虫垂仮性憩室報告例の検討および文献的考察を加え報告した。

なお、本論文の要旨は第201回福岡外科集談会で発表した。

文 献

- 1) 田中忠良, 大西博三, 兼定博彦ほか: 盲腸憩室炎を契機に発見された虫垂憩室の1例. 臨外 40: 1609—1612, 1985
- 2) 佐藤浩一, 渡部洋三, 城所 佑ほか: 虫垂憩室穿孔による腹膜炎の1治験例. 日消外会誌 17: 2071—2074, 1984
- 3) Trolpe ML, Lindenauer SM: Diverticulosis of the appendix. Dis Colon Rectum 17: 200—218, 1974
- 4) Collins DC: A study of 50,000 specimens of the human vermiform appendix. Surg Gyencol obstet 101: 437—445, 1955
- 5) Delikalis P, Teglbjaerg PS, Fisker-Sørensen P et al: Diverticula of the vermiform appendix. Dis Colon Rectum 26: 374—376, 1983
- 6) 池田 正: 虫垂憩室の4例. 外科 18: 419—425, 1956
- 7) 村田 順, 高橋 敏, 岩崎 裕ほか: 虫垂憩室穿孔の1例. 外科 40: 1035—1036, 1978
- 8) 三好俊策, 上竹正躬, 福島範子: 虫垂憩室症の6例. 同愛医誌 10: 83—92, 1978
- 9) Deschênes L, Couture J, Garneau R: Diverticulitis of the appendix. Am J Surg 121: 706—709, 1971